

わんだあらんど

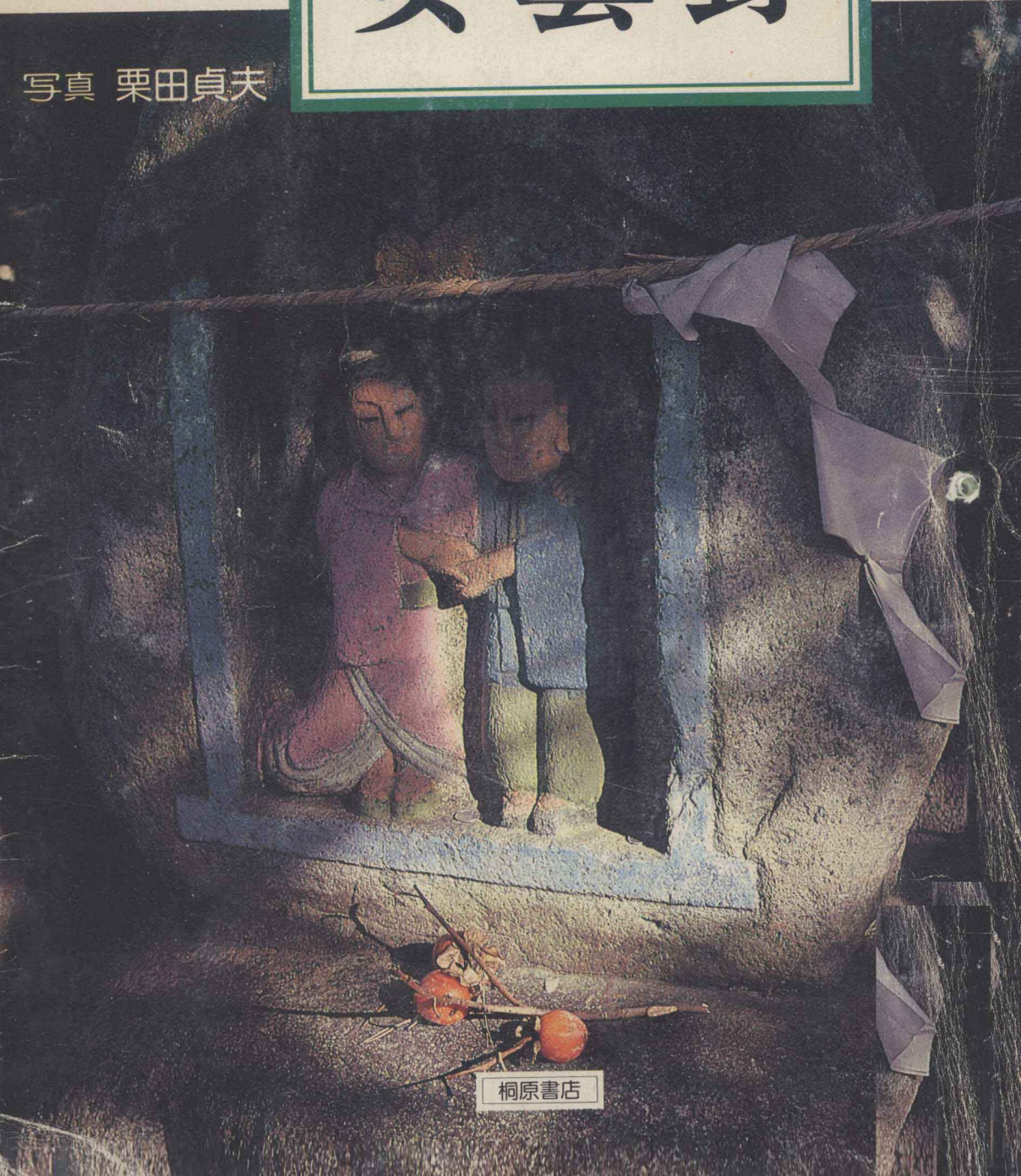
別役

実

Rambling
Guide
野と里と

安曇野

写真 栗田貞夫



桐原書店

執筆者 別役 実

昭和12年中国、新京生まれ。早稲田大学政治経済学部中退。昭和42年「マッチ売りの少女」「赤い鳥のいる風景」で岸田戯曲賞受賞。戯曲に「にしむくさむらい」、童話集に「淋しいおさかな」、評論集に「電信柱のある宇宙」他多数がある。



写真 栗田 貞夫
レイアウト 上田 敬
イラスト 安井 善太
モデル 山埜有佳子
編集 竹山 文士
協力 甚六
ビラ・カンパネロ

わんだぁらんど 安曇野

1981年5月5日 初版発行

著 者 別役 実
発行者 山崎賢二
印刷所 共同印刷株式会社
発行所 株式会社 桐原書店

東京都杉並区阿佐ヶ谷南3-4-22(〒166)

電話 03(392)-5121(代表) 振替 (東京) 6-55244

© M.BETSUYAKU

わんだあらんど
安曇野

光満つ

あらゆる幻想は光の中にある。その静けさを聞きとることから始められる

緑山美術館



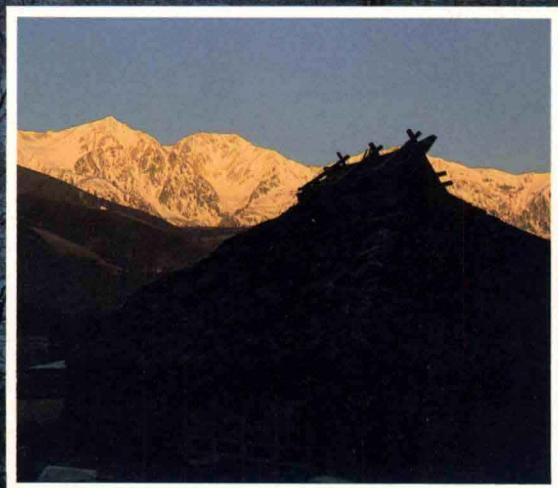
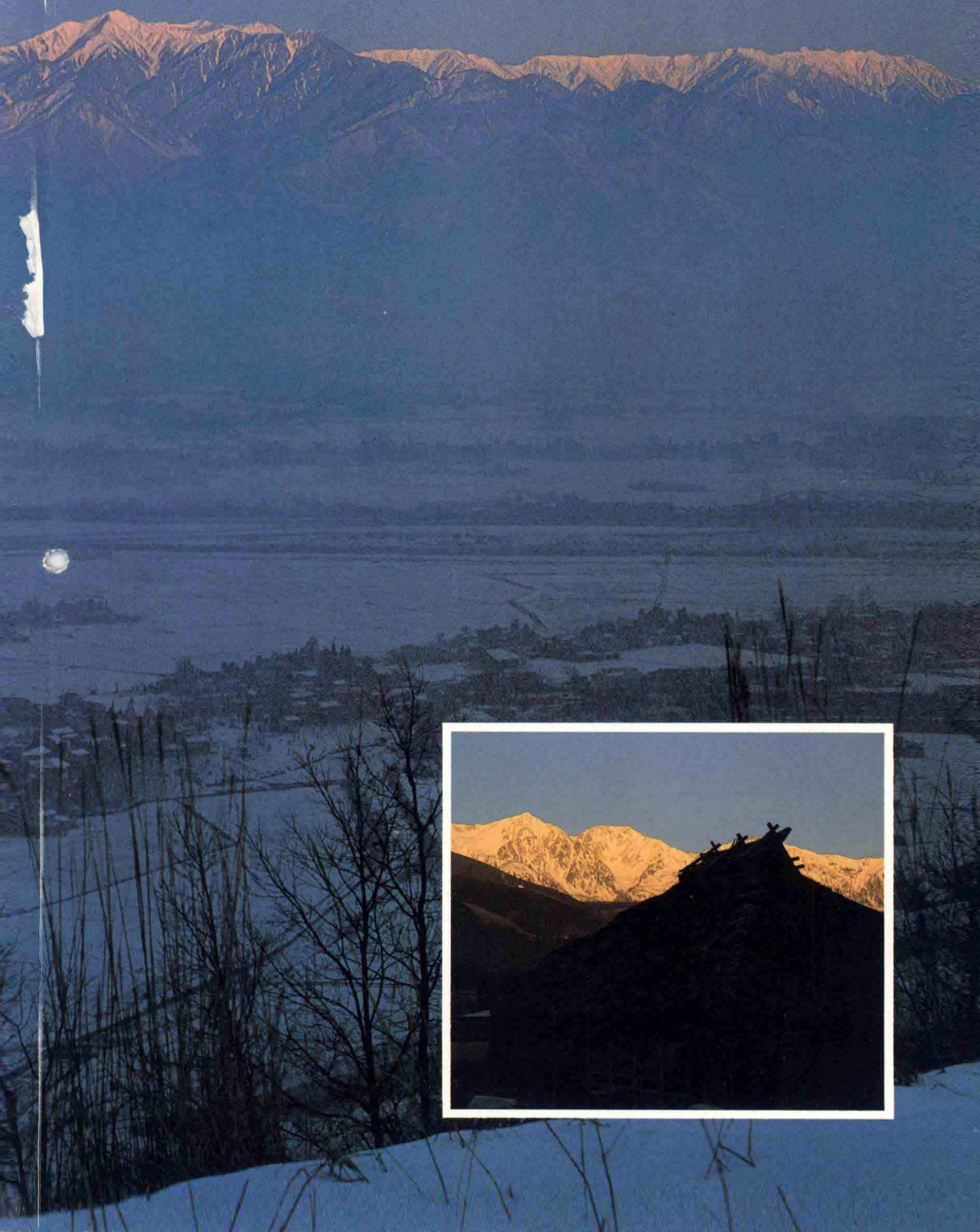
ここでは、風景の中で立止つて、ふと顔を
上げただけでは、足りない。山は、もうち
よつと高いところにある。



白屋の幻想
ありありと、それはそこに在る。



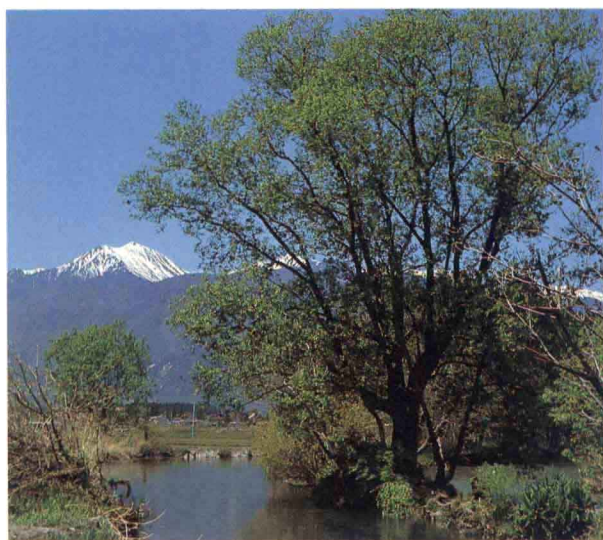
朝の最初の光は、先ず常念岳の頂きに届けられる。そして世界が開かれる。





安曇野の音は、水の流れの音である。安曇野の色は、水の映し出す色である。

ここには、流れがあり、湖があり、水田があり、わさび畑がある。そのそれぞれが安曇野であり、そのそれぞれがもうひとつの安曇野をのぞきこむための、鏡である。





わさびの辛さは、水の冷め
たさを、結晶させたものに
違いない。こんなに透明な
辛さは、ほかにはない。







夜が来ると、風景はそれぞれ、自分たちだけの灯をともす。

野の広さに気付いて、ふと立止る。自分自身がそこに居ることを確かめるために。



これは、広さという迷路に立つ道しるべである。



野を行くための、決して動くことをしない乗物のようだ。







道があつて、家があつて、しかし
誰もいない。あの先を曲つたら、
誰かに会つだろうか。



オーイ、と呼んでみた。しかし返事はなかった。